

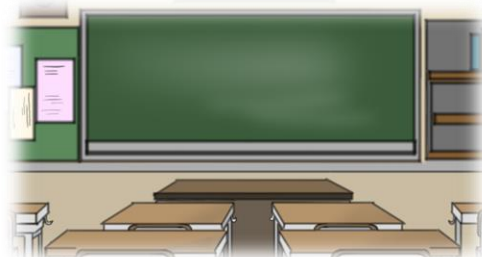
# 『みんなの笑顔のために』

## 6月は『心のきずなを深める月間』です。

～いじめを許さない学校・学級を目指して～

いじめは人権を無視した卑劣な行為であり、人の命をも奪うものです。その根絶に向けて一人一人が真剣に考え、取り組んでいくための月間です。次の文章は、いじめをなくし心のきずなを深めるためにはどうすればよいのかを教えてくれる、これまで何度も読み返してきた資料です。

是非読んでみてください。



久しぶり・・・ほんとうに久しぶりに学校に行きました。登校すると決めて、昨日の午後から準備を始めたけど、つらさがこみあげてきて、その上緊張してか、涙があふれて止まりません。

でも、学校に行っていない私のために、この10日ほど、私の家で学習会をしてくれている新しい班の4人の友だちの願いに、

「何とかしなければ」「私が変わらなければ」と思い続けていました。でも、吐き気がしたり、発熱したり、が続きました。午後4時を過ぎたら決まって来てくれる4人の顔を見るのがつらくなっていった・・・そんな時、すぐる君が、ぽつと言った言葉にハッとさせられました。「おれ、この学習会はじめてこの班を好きになりよる。あんたたちやさしいもん」・・・意外でした。いやいやで来ている。担任の先生から言われて来ている。少し迷惑・・・と思っていたのに、この学習会を喜んで・・・班がやさしいとは・・・。そういえば、4人の中のひとり、まゆみさんが、とても明るく感じられていました。まゆみさんとは、小学校の時も同じクラスで、ほとんど口を開いたことがない無口で暗い感じの人でした。でも、この学習ではニコニコして教科書やノートを広げて、どんどん質問しています。質問の中身も学校を長く休んでいる私よりつまずいているところも時々あるのです。

「自分のためにしているのよ。浩子さんあなたのためじゃない。気にしないでよ。」「この5班が楽しくなるもん。信頼できるようになっていくとよ。」「うん、そうそう。」

みんなが帰った後ひとりで考えました。私はそんな思いをどう受けとめればいいのか。今も学校を休み続けている私・・・。世の中がみんな冷たく、敵にさえ見えていた私。

「何か違う。どこか違う。」「私はどうすればいいの？今やるべきことは？」「この班の人たちだったら、私のつらさをわかってくれる。1年の時のようにしつこくいじめられはしない。いや、私を守ってくれる。」「学校に行ってみようか。きっかけをつかみたい。」

そして2日前、私の家の学習会の終わりに、「学校に行きたい。怖い気もするけど・・・。」と言いました。思わず起こった4人の拍手。

その朝、7時半に4人そろって迎えに来てくれて、見送ってくれた弟の敏夫がとてもうれしそうに、「いってらっしゃい。」と言ってくれました。登校前に、寝たきりの祖母に、「今日から学校に行くけんね。お昼までに帰ってくるけん、しんぼうしとってね。」と言うと、目をつむって何度もうなずいていました。

通学路で会う友だちにも、駐輪場で会う友だちにも、できるだけ目を合わさないように、下を向いていました。二度ほど、立ちくらみのように目の前が真っ黒になり、たおれそうになりました。でも、班の4人は私を囲むように守ってくれました。

2の3の教室に入るとき一番緊張しました。「どんな学級？どんな友だち？」同じ5班の4人しか知らない・・・。

→裏面につづく



あいさつをしながら教室に入ってびっくりしました。もうみんな来ていて、学習会をしているのです。班で顔を寄せ合ったり、教科書から書き取ったりしながら楽しそうでした。「何か違う。」「どこか違う。」

先生も2班のところで質問を受けながらうなずきあって・・・次の班に行かれました。もっとびっくりしたのは授業でした。1時間目は社会でしたが、みんなとても積極的で、質問もたくさん出て、とても楽しい授業でした。1年生のときの授業は、先生が説明するだけで、質問もなく、ノートをとるだけのつまらない授業だったからです。私たち5班も、2度質問しました。

1年生の10月から、不登校になって、家もいや、学校もいや、何もする気も起こりませんでした。そのときのクラスはバラバラで、不登校の人がもう1人、いつも保健室にいく人が2人。強い人が思い通りにする怖いクラスでした。私の家庭がこんなになってから、運動靴の中に死んだトカゲをいれられたり、夜遅くに無言電話がかかってきたり・・・でも一番つらかったのは、誰も話してくれないことと、私が近寄ったら話を途中で止めてしまっていて、そこに誰もいなくなることでした。班の人も一緒になっていたのでも、休み時間はいるところがなくて、とても困りました。何度も、「死にたい」と思いました。いじめで自殺していく人の気持ちがよくわかります。ひとりです。ひとりぼっちです。友だちも先生たちもとても冷たい目をしていて怖いのです。

でも、私は死ねなかった。あの夜突然消えてしまった母、アルコール依存症の父、この2人には頼れない。けれど、私を信じ、幼い心で疑いもせず、懸命に生きている小学6年になったばかりの弟、敏夫がいる。そして、奥の部屋には、自分では一歩も動けず、すべてを私と弟の介護に頼る寝たきりの祖母がいる。どんなにつらくとも、生き続けるしかなかった。米と野菜は松原のおじさんが届けてくれるけど、お金には困った。人のぬくもりが欲しかった。私が泣くとき、弟もしみじみ泣いていた。でも、今は違う。2の3の教室は違う。班も班友も違う。きっと、つらさを言える、励まし、力を貸してくれる。弟と祖母を守って生きていける。

六月になって、先生の世話でバイトをすることになりました。学校の許可も取ってくれました。弁当屋さんで9時まで働きます。1週に4日だけど、そのお金がとてもありがたいのです。

その夜は、9時40分頃家に着きました。そして、いつものように弁当屋さんにもらったおかずで弟と祖母に夕食の準備を急ごうとすると、もうお皿に準備がしてあり、弟はニコニコしています。そして、「おばあちゃんもごはん終わったよ。」といいながら、1通の紙を差し出すのです。

それは、5班のまゆみさんとちえみさんからでした



**浩子ごくろうさん。私たち2人、何かできることはないかと話し合ってきました。**

**食事・風呂・おばあちゃんのお世話をしました。敏夫くんも手伝ってくれて仲良しになれました。でも、浩子の生活を知りました。まさに闘いなよね。がんばりいよ。**

**私たち2人のはげみです。**

**また、来週の火曜日に来ます。安心してバイトをやってください。**

**浩子のがんばりは私たちの灯です。では、また明日ね。**

私の目は、あふれる涙で、手紙の文字がぼやけてゆれました。